大学生における沖縄の社会状況の認知に関する研究

大城宜武・與久田　巌・中村　完

要　旨

本研究の目的は、大学生が沖縄の社会状況をどのように認知しているかを検討することである。

654人の大学生がアンケートに答えた。大学生は、３つのグループに分類された、すなわち、沖縄県内居住の沖縄出身者、沖縄県内居住者で沖縄県外出身者、沖縄県外居住で沖縄県外出身者のグループである。

戦争をめぐる問題では、グループと問題認知の間に有意な連関はなかった。人権問題と自治問題ではグループとの連関が有意であった。沖縄の大学生は米国に対してやや肯定的であり、沖縄県外の学生は否定的であった。

はじめに

沖縄は明治12年のいわゆる「琉球処分」によって、日本の版図に加えられる。東京から見れば辺境の地であり、歴史、文化、風俗習慣などことごとく異なる異境であったろう。沖縄から見ても東京は同様なことがいえよう。

第二次世界大戦での日本の敗戦は、沖縄を米国の統治下に置く国際関係を構築させた。米国はこの地に広大な軍事基地を建設し、軍政が敷かれ沖縄住民は自治権、人権を制限され、国際情勢と絶えず連動しながら「戦争」ストレスに曝される日常生活を余儀なくされた。政治、経済、社会、文化は米国の影響下に置かれ米国によって絶えず翻弄されてきた。米軍事基地に起因する事件事故は枚挙に暇がなく、「異民族支配」によって社会不安が醸成されてきた。1972年に、沖縄の施政権は米国から日本に返還された。これを沖縄の側からは「日本復帰」と呼ぶ。この復帰を境に「復帰不安」なる「世替わり」に伴う不安が沖縄社会を覆った。施政権返還後も、米軍の施設区域（いわゆる米軍基地）は、存続し、米軍は駐留し続け、日米両国政府は日米安保条約を梃に沖縄の米軍基地の保全を強硬に推進する現状である。したがって、沖縄は米国や日本政府からのストレスに曝され、アイデンティティ拡散の状況にあるといえる。

与那嶺、他（1981）は復帰をめぐる沖縄社会の不安を把握する枠組みとして、不安対象（戦争、自治、人権）、不安領域（政治、経済、文化、社会）、そして不安の種類（対日本、対沖縄、対米国）を仮設した。すなわち３ｘ４ｘ３＝36のサブユニバースでもって不安を捉える試みであった。本研究は、この研究モデルを援用しつつ４つの不安領域のうちから文化不安を取り出し、不安対象（戦争不安、自治不安、人権不安）ごとに分析する。調査対象は沖縄県内外の大学生男女である。かれらは施政権返還（いわゆる日本復帰）前後にはこの世に生を受けていない。したがって、その内実についても体験をしていない。この世代の者たちがどのように沖縄を取り巻く状況を認知またはイメージしているかを解明したい企図を持っている。

本研究の目的は、大学生における沖縄の社会状況の認知に関する現況を把握することである。

方　法

１．調査対象：沖縄県に在住する大学生男女を中心に、心理学関連科目の受講生を対象とした。

２．調査の実施：2007年５月から７月。講義時間に集団法によって実施した。調査には約20分を要した。

３．個人情報の保護：調査データは厳重に管理されプライバシーが保護されることを明記した。

４．調査項目：不安の対象、領域、種類の各ユニバースに２種の設問を設定した３件法による73の基本設問、19のサブ質問に、デモグラフィック項目を含む全98設問で構成した（中村ら、2005）。本稿では次に掲げる基本設問18項目について検討する。以下設問は略記してある場合がある。

Ｑ１　最近の教育の流れからして、今後ますます戦前のような国土防衛、戦争肯定の教育が強調されるおそれがある

Ｑ２　日本の歴史や文化をみた時に、日本人は元来

戦争を好む民族だ

Ｑ３　沖縄戦をテーマとしたテレビや映画を見るとき、戦争はいやだと思う

Ｑ４　沖縄の人々は平和を愛する気持ちが強いといわれますが、そのような気持ちは戦争を防ぐ力になる

Ｑ５　一般に米国人は、特定の国を極度に危険視し、嫌う傾向がありますが、このことが戦争の危険性を大きくしている

Ｑ６　米国人が自国の単なる名誉やメンツを守るために、戦争を始めるおそれがある

Ｑ７　日本では中央の文化を押し付けることに熱心で、地方の文化を尊重しない

Ｑ８　日本人は自国のものよりも欧米の芸術や学問、思想をよりすぐれたものとみる傾向がある

Ｑ９　ウチナーグチは、沖縄の文化の基礎となるものであるから、大いに保護・奨励すべきだ

Ｑ10　沖縄の人々の中で、沖縄はつまらないところで、自分たちは弱いものだと考えている人が多い

Ｑ11　戦後米軍援助による米国留学制度がなかったならば、今日のような沖縄の文化的・社会的発展はみられなかった

Ｑ12　二七年間にわたる米国の統治によって、沖縄の人々の生活様式は、かなり米国化してきましたが、それをよいと思う

Ｑ13　沖縄の人が方言を使うと、他府県のひとはそれを軽蔑的な眼で見る

Ｑ14　日本では義理人情とか恩とかがやかましくいわれていて、個人の自由な意見や自主性が重んじられていない

Ｑ15　沖縄の人は何か問題が起こると、ユタに相談することが多い

Ｑ16　沖縄では誰でも平等に自分の能力を十分に伸ばすための教育を受けることができる

Ｑ17　米国は人権尊重の国だといわれていますが、実際に米国人の生活や、やり方を見聞きして、確かにそうだと思う

Ｑ18　戦後沖縄の郷土芸能・文化が盛んになってきたのは、米国が沖縄の郷土文化を尊重したためだ

５．データ処理：ＳＰＳＳ　Ｆｏｒ　Ｗｉｎｄｏｗｓを用いた。文化領域を中心に、カイ二乗検定を施した。調査対象者を、沖縄県居住で沖縄県出身者（県内県内群）、沖縄県内居住で沖縄県外出身（県内県外群）、沖縄県外居住で、沖縄県外出身者（県外県外群）に区分し、３群間比較を行なった。

結　果

１　クロス分析

回収された調査票は、654件であるが、出身地に10件が無回答であったので644ケースについて分析を施した。内訳は県内県内群340件、県内県外群98件、県外県外群206件である。分析の対象とした設問項目は、不安対象（戦争、自治、人権）に関わる文化領域についての18個である。居住地・出身地（県内県内、県内県外、県外県外、の３水準）と設問への回答カテゴリー（思う、思わない、どちらとも言えない、の３水準）との間の連関をクロス分析で検討した。結果は次のように概括される（表０を参照。結果の詳細は表１から

表０　結果の概括

	対日本		対沖縄		対米国	
戦	1	戦争肯定教育n.s.	3	戦争主題のドラマn.s.	5	特定の国を危険視n.s.
争	2	日本人は好戦的n.s.	4	平和愛好は戦争抑止n.s.	6	米国は面子で戦争n.s.
自	7	中央文化押しつけ**	9	方言奨励態度*	11	米留制度の貢献***
治	8	日本人は欧米崇拝n.s.	10	沖縄人は自己卑下***	12	生活様式米国化***
人	13	方言は軽蔑される***	15	沖縄人はユタに相談***	17	米国は人権尊重***
権	14	義理人情重視**	16	沖縄でも教育機会均等**	18	沖縄文化尊重n.s.

n.s.:not significant　* p<.01　** .001　*** p=.000

表１～18に関わる凡例

この表は設問項目と居住出身のクロス分析結果を掲げている。

「居住出身区分の％」は列ごとの回答比率を示している。

「調整済残差」は、周辺度数に対する実数と期待度数の差異を調整したもので、この値が1.96より大きければ観測度数が期待度数より有意に大きいことを表わし、マイナス1.96より小さければ観測度数が期待度数を有意に下回っていることを表す。総合計が644を下回っている場合は、設問に対する無回答があったためである。

表１　最近の教育の流れからして、今後ますます戦前のような国土防衛、戦争肯定の教育が強調されるおそれがある

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
最近の教育の流れからして、今後ますます戦前のような国土防衛、戦争肯定の教育が強調されるおそれがある	思う	度数	182	48	94	324
		居住出身区分の％	53.5％	49.0％	45.6％	50.3％
		調整済み残差	1.7	−.3	1.6	
	思わない	度数	78	26	66	170
		居住出身区分の％	22.9％	26.5％	32.0％	26.4％
		調整済み残差	−2.1	.0	2.2	
	どちらともいえない	度数	80	24	46	150
		居住出身区分の％	23.5％	24.5％	22.3％	23.3％
		調整済み残差	.2	.3	−.4	
合計		度数	340	98	206	644
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=5.805、df=4、p=.214

表２　日本の歴史や文化をみた時に、日本人は元来戦争を好む民族だ

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
日本の歴史や文化をみた時に、日本人は元来戦争を好む民族だ	思う	度数	79	12	38	129
		居住出身区分の％	23.3％	12.2％	18.4％	20.1％
		調整済み残差	2.2	−2.1	−.7	
	思わない	度数	156	57	110	323
		居住出身区分の％	46.0％	58.2％	53.4％	50.2％
		調整済み残差	-2.3	1.7	1.1	
	どちらともいえない	度数	104	29	58	191
		居住出身区分の％	30.7％	29.6％	28.2％	29.7％
		調整済み残差	.6	.0	−.6	
合計		度数	339	98	206	643
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=8.141、df=4、p=.087

表３　沖縄戦をテーマとしたテレビや映画を見るとき、戦争はいやだ

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
沖縄戦をテーマとしたテレビや映画を見るとき、戦争はいやだ	思う	度数	325	92	190	607
		居住出身区分の％	95.6％	93.9％	92.7％	94.4％
		調整済み残差	1.4	−.2	−1.3	
	思わない	度数	8	3	4	15
		居住出身区分の％	2.4％	3.1％	2.0％	2.3％
		調整済み残差	.0	.5	−.4	
	どちらともいえない	度数	7	3	11	21
		居住出身区分の％	2.1％	3.1％	5.4％	3.3％
		調整済み残差	−1.8	−.1	2.0	
合計		度数	340	98	205	643
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=4.767、df=4、p=.312

表４　沖縄の人々は平和を愛する気持ちが強いといわれますが、そのような気持ちは戦争を防ぐ力になる

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
沖縄の人々は平和を愛する気持ちが強いといわれますが、そのような気持ちは戦争を防ぐ力になる	思う	度数	277	75	163	515
		居住出身区分の％	81.5％	76.5％	79.1％	80.0％
		調整済み残差	1.0	−.9	−.4	
	思わない	度数	32	10	24	66
		居住出身区分の％	9.4％	10.2％	11.7％	10.2％
		調整済み残差	−.7	.0	.8	
	どちらともいえない	度数	31	13	19	63
		居住出身区分の％	9.1％	13.3％	9.2％	9.8％
		調整済み残差	−.6	1.3	−.3	
合計		度数	340	98	206	644
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=2.321、df=4、p=.677

表５　一般に米国人は、特定の国を極度に危険視し、嫌う傾向がありますが、このことが戦争の危険性を大きくしている

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
一般に米国人は、特定の国を極度に危険視し、嫌う傾向がありますが、このことが戦争の危険性を大きくしている	思う	度数	287	75	176	538
		居住出身区分の％	84.4％	76.5％	85.4％	83.5％
		調整済み残差	.6	−2.0	.9	
	思わない	度数	13	7	10	30
		居住出身区分の％	3.8％	7.1％	4.9％	4.7％
		調整済み残差	−1.1	1.3	.2	
	どちらともいえない	度数	40	16	20	76
		居住出身区分の％	11.8％	16.3％	9.7％	11.8％
		調整済み残差	.0	1.5	−1.1	
合計		度数	340	98	206	644
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=4.986、df=4、p=.289

表６　米国人が自国の単なる名誉やメンツを守るために、戦争を始めるおそれがある

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
米国人が自国の単なる名誉やメンツを守るために、戦争を始めるおそれがある	思う	度数	261	66	160	487
		居住出身区分の％	76.8％	67.3％	77.7％	75.6％
		調整済み残差	.7	−2.1	.8	
	思わない	度数	34	13	26	73
		居住出身区分の％	10.0％	13.3％	12.6％	11.3％
		調整済み残差	−1.1	.7	.7	
	どちらともいえない	度数	45	19	20	84
		居住出身区分の％	13.2％	19.4％	9.7％	13.0％
		調整済み残差	.2	2.0	−1.7	
合計		度数	340	98	206	644
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=7.008、df=4、p=.135

表７　日本では中央の文化を押し付けることに熱心で、地方の文化を尊重しない

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
日本では中央の文化を押し付けることに熱心で、地方の文化を尊重しない	思う	度数	103	26	54	183
		居住出身区分の％	30.3%	26.5%	26.2%	28.4%
		調整済み残差	1.1	−.4	−.8	
	思わない	度数	102	44	92	238
		居住出身区分の％	30.3%	44.9%	44.7%	37.0%
		調整済み残差	−3.9	1.8	2.8	
	どちらともいえない	度数	135	28	60	223
		居住出身区分の％	39.7%	28.6%	29.1%	34.6%
		調整済み残差	2.9	−1.4	−2.0	
合計		度数	340	98	206	644
		居住出身区分の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

χ^2=15.700、df=4、p=.003

表８　日本人は自国のものよりも欧米の芸術や学問、思想をよりすぐれたものとみる傾向がある

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
日本人は自国のものよりも欧米の芸術や学問、思想をよりすぐれたものとみる傾向がある	思う	度数	183	49	103	335
		居住出身区分の％	53.8%	50.0%	50.0%	52.0%
		調整済み残差	1.0	−.4	−.7	
	思わない	度数	66	23	54	143
		居住出身区分の％	19.4%	23.5%	26.2%	22.2%
		調整済み残差	−1.8	.3	1.7	
	どちらともいえない	度数	91	26	49	166
		居住出身区分の％	26.8%	26.5%	23.8%	25.8%
		調整済み残差	.6	.2	−.8	
合計		度数	340	98	206	644
		居住出身区分の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

χ^2=3.674、df=4、p=.452

表９　ウチナーグチは、沖縄の文化の基礎となるものであるから、大いに保護・奨励すべきだ

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
ウチナーグチは、沖縄の文化の基礎となるものであるから、大いに保護・奨励すべきだ	思う	度数	303	80	164	547
		居住出身区分の％	89.6%	82.5%	80.0%	85.5%
		調整済み残差	3.2	−.9	−2.7	
	思わない	度数	14	7	12	33
		居住出身区分の％	4.1%	7.2%	5.9%	5.2%
		調整済み残差	−1.2	1.0	.5	
	どちらともいえない	度数	21	10	29	60
		居住出身区分の％	6.2%	10.3%	14.1%	9.4%
		調整済み残差	−2.9	.3	2.8	
合計		度数	338	97	205	640
		居住出身区分の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

χ^2=11.848、df=4、p=.019

表10　沖縄の人々の中で、沖縄はつまらないところで、自分たちは弱いものだと考えている人が多い

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
沖縄の人々の中で、沖縄はつまらないところで、自分たちは弱いものだと考えている人が多い	思う	度数	49	5	5	59
		居住出身区分の％	14.5%	5.2%	2.5%	9.3%
		調整済み残差	4.9	−1.5	−4.0	
	思わない	度数	232	72	153	457
		居住出身区分の％	68.8%	74.2%	75.4%	71.7%
		調整済み残差	−1.7	.6	1.4	
	どちらともいえない	度数	56	20	45	121
		居住出身区分の％	16.6%	20.6%	22.2%	19.0%
		調整済み残差	−1.6	.4	1.4	
合計		度数	337	97	203	637
		居住出身区分の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

χ^2=25.098、df=4、p=.000

表11　戦後米軍援助による米国留学制度がなかったならば、今日のような沖縄の文化的・社会的発展はみられなかった

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
戦後米軍援助による米国留学制度がなかったならば、今日のような沖縄の文化的・社会的発展はみられなかった	思う	度数	147	27	35	209
		居住出身区分の％	43.6%	28.1%	17.2%	32.9%
		調整済み残差	6.1	−1.1	−5.7	
	思わない	度数	43	18	45	106
		居住出身区分の％	12.8%	18.8%	22.2%	16.7%
		調整済み残差	−2.8	.6	2.5	
	どちらともいえない	度数	147	51	123	321
		居住出身区分の％	43.6%	53.1%	60.6%	50.5%
		調整済み残差	−3.7	.6	3.5	
合計		度数	337	96	203	636
		居住出身区分の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

χ^2=42.007、df=4、p=.000

表12　二七年間にわたる米国の統治によって、沖縄の人々の生活様式は、かなり米国化してきましたが、それをよいこと

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
二七年間にわたる米国の統治によって、沖縄の人々の生活様式は、かなり米国化してきましたが、それをよいこと	思う	度数	75	12	10	97
		居住出身区分の％	22.3%	12.4%	4.9%	15.2%
		調整済み残差	5.3	−.8	−5.0	
	思わない	度数	41	18	48	107
		居住出身区分の％	12.2%	18.6%	23.4%	16.7%
		調整済み残差	−3.3	.5	3.1	
	どちらともいえない	度数	221	67	147	435
		居住出身区分の％	65.6%	69.1%	71.7%	68.1%
		調整済み残差	−1.4	.2	1.4	
合計		度数	337	97	205	639
		居住出身区分の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

χ^2=36.525、df=4、p=.000

表13　沖縄の人が方言を使うと、他府県のひとはそれを軽蔑的な眼で見る

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
沖縄の人が方言を使うと、他府県のひとはそれを軽蔑的な眼で見る	思う	度数	40	5	4	49
		居住出身区分の％	11.8％	5.2％	2.0％	7.7％
		調整済み残差	4.2	−1.0	−3.7	
	思わない	度数	242	86	186	514
		居住出身区分の％	71.6％	88.7％	90.7％	80.3％
		調整済み残差	−5.9	2.2	4.6	
	どちらともいえない	度数	56	6	15	77
		居住出身区分の％	16.6％	6.2％	7.3％	12.0％
		調整済み残差	3.7	−1.9	−2.5	
合計		度数	338	97	205	640
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=36.347、df=4、p=.000

表14　日本では義理人情とか恩とかがやかましくいわれいて、個人の自由な意見や自主性が重んじられていない

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
日本では義理人情とか恩とかがやかましくいわれいて、個人の自由な意見や自主性が重んじられていない	思う	度数	71	20	51	142
		居住出身区分の％	21.0％	20.6％	25.0％	22.2％
		調整済み残差	−.8	−.4	1.2	
	思わない	度数	148	49	112	309
		居住出身区分の％	43.8％	50.5％	54.9％	48.4％
		調整済み残差	−2.4	.5	2.3	
	どちらともいえない	度数	119	28	41	188
		居住出身区分の％	35.2％	28.9％	20.1％	29.4％
		調整済み残差	3.4	−.1	−3.5	
合計		度数	338	97	204	639
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=14.289、df=4、p=.006

表15　沖縄の人は何か問題が起こると、ユタに相談することが多い

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
沖縄の人は何か問題が起こると、ユタに相談することが多い	思う	度数	145	16	8	169
		居住出身区分の％	42.9％	16.7％	3.9％	26.5％
		調整済み残差	10.0	−2.4	−8.9	
	思わない	度数	102	28	82	212
		居住出身区分の％	30.2％	29.2％	40.2％	33.2％
		調整済み残差	−1.7	−.9	2.6	
	どちらともいえない	度数	91	52	114	257
		居住出身区分の％	26.9％	54.2％	55.9％	40.3％
		調整済み残差	−7.3	3.0	5.5	
合計		度数	338	96	204	638
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=113.379、df=4、p=.000

表16　沖縄では誰でも平等に自分の能力を十分に伸ばすための教育を受けることができる

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
沖縄では誰でも平等に自分の能力を十分に伸ばすための教育を受けることができる	思う	度数	121	39	92	252
		居住出身区分の％	35.9％	40.2％	45.1％	39.5％
		調整済み残差	−2.0	.2	2.0	
	思わない	度数	100	25	29	154
		居住出身区分の％	29.7％	25.8％	14.2％	24.1％
		調整済み残差	3.5	.4	−4.0	
	どちらともいえない	度数	116	33	83	232
		居住出身区分の％	34.4％	34.0％	40.7％	36.4％
		調整済み残差	−1.1	−.5	1.6	
合計		度数	337	97	204	638
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=16.984、df=4、p=.002

表17　米国は人権尊重の国だといわれていますが、実際に米国人の生活や、やり方を見聞きして、確かにそうだ

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
米国は人権尊重の国だといわれていますが、実際に米国人の生活や、やり方を見聞きして、確かにそうだ	思う	度数	71	13	22	106
		居住出身区分の％	21.0％	13.4％	10.7％	16.6％
		調整済み残差	3.2	−.9	−2.7	
	思わない	度数	109	32	101	242
		居住出身区分の％	32.2％	33.0％	49.3％	37.8％
		調整済み残差	−3.1	−1.1	4.1	
	どちらともいえない	度数	158	52	82	292
		居住出身区分の％	46.7％	53.6％	40.0％	45.6％
		調整済み残差	.6	1.7	-2.0	
合計		度数	338	97	205	640
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=22.171、df=4、p=.000

表18　戦後沖縄の郷土芸能・文化が盛んになってきたのは、米国が沖縄の郷土文化を尊重したためだ

			居住出身区分			合計
			県内県内	県内県外	県外県外	
戦後沖縄の郷土芸能・文化が盛んになってきたのは、米国が沖縄の郷土文化を尊重したためだ	思う	度数	58	14	32	104
		居住出身区分の％	17.2％	14.4％	15.7％	16.3％
		調整済み残差	.6	−.5	−.3	
	思わない	度数	134	35	75	244
		居住出身区分の％	39.6％	36.1％	36.8％	38.2％
		調整済み残差	.8	−.5	−.5	
	どちらともいえない	度数	146	48	97	291
		居住出身区分の％	43.2％	49.5％	47.5％	45.5％
		調整済み残差	−1.3	.8	.7	
合計		度数	338	97	204	639
		居住出身区分の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

χ^2=1.737、df=4、p=.784

表18を参照)。

１．１　戦争不安

表０結果の概括に掲げたように、連関が有意であったのは18設問中10設問であった。戦争不安に関する全ての項目で連関が有意でなかった。すなわち戦争に関連する不安状態については居住地や出身地域と関わりなく似たような反応をしている。(表１から表６について、表頭に掲げる合計列の「思う」「思わない」「どちらともいえない」の比率を参照)

「戦争肯定の教育が強調される」に「思う」と反応した者の比率は50％を超える。(表１参照)

「日本人は戦争を好む民族」と「思わない」比率は50%を超える。(表２参照)

「沖縄戦をテーマにしたテレビや映画を見ると戦争はいやだ」と「思う」比率は94％を超える。(表３参照)

「平和を愛する強い気持ちは戦争の抑止になる」と「思う」比率は80％である。(表４参照)

「米国人の敵視的態度は戦争の危険を高める」と「思う」比率は83％を超える。(表５参照)

「米国人は単なる名誉やメンツのために戦争を始める」と「思う」比率は75％を超える。(表６参照)

１．２　自治不安

自治不安については、居住地域・出身地域によって違いのあることが認められた。すなわち、自治不安に関する６項目中５項目で連関が有意であった。

「地方文化が尊重されていない」ことについて「思う」は、群間に違いは少ない。「思わない」比率は県内県内群で有意に少なく、県外県外群で有意に多い。(表７参照)

「日本人は自国よりも欧米の芸術や学問、思想をすぐれたものとみる傾向がある」については連関は有意でない。ただし、回答カテゴリーの比率には有意差があり、「思う」の比率は50％を超えている。(表８参照)日本人は欧米追従的であるとされているのである。

「ウチナーグチ（沖縄語）は大いに保護奨励すべき」は連関が有意であり、「思う」の比率は県内県内で有意に多く、県外県外で有意に少ない。また、「どちらともいえない」の比率は県内県内で有意に少なく、県外県外で有意に多い。(表９参照)

「沖縄の人々は自己卑下的である」では、連関が有意であり、「思う」の比率は県内県内で有意に多く、県外県外で有意に少ない。(表10参照)

「米国留学制度は、沖縄の文化的、社会的発展に貢献した」では連関は有意であり、「思う」の比率は県内県内で有意に多く、県外県外で有意に少ない。また「思わない」は県内県内で有意に少なく、県外県外で有意に多い。(表11参照)

「沖縄の人々の生活様式は欧米化している」では連関が有意であり、「思う」の比率は県内県内で有意に多く、県外県外で有意に少ない。「思わない」の比率は県内県内で有意に少なく、県外県外で有意に多い。(表12参照)

１．３　人権不安

文化領域に関わる人権不安項目６個のうち、５項目において連関が有意であった。

「沖縄方言を他府県の人は軽蔑的に見る」では連関が有意であり、「思う」の比率は県内県内で有意に多く、県外県外で有意に少ない。「思わない」の比率は県内県内で有意に少なく、県外県外で有意に多い。(表13参照)

「日本では個人の自由な意見や自主性が重んじられない」では連関が有意であり、「思う」は群間に有意な差異は認められない。「思わない」の比率は、県内県内で有意に少なく、県外県外で有意に多い。また、「どちらともいえない」の比率は県内県内で有意に多く、県外県外で有意に少ない。(表14)

「沖縄の人は何か問題があるとユタに相談することが多い」では「思う」の比率は県内県内で有意に多く、県内県外および県外県外で有意に少ない。「どちらともいえない」の比率は県内県内で有意に少なく、県内県外および県外県外で有意に多い。(表15参照)

「沖縄では能力を十分に伸ばす教育が受けられる」では連関が有意であり、「思う」の比率は県内県内で有意に少なく、県外県外で有意に多い。「思わない」の比率は県内県内で有意に多く、県外県外で有意に少ない。(表16参照)

「米国は人権尊重の国である」では連関が有意であり、「思う」は県内県内で有意に多く県外県外で有意に少ない。「思わない」の比率は県内県内で有意に少なく県外県外で有意に多い。(表17参照)

「沖縄の郷土芸能・文化は米国が沖縄の郷土文化を尊重したからである」では連関は有意でなかった。回

答カテゴリーの比率は「どちらともいえない」が45％を超えた。「思わない」は38％を超えた。「思う」の比率は約16％である。（表18参照）

考　察

1　ウチナーグチ（沖縄語）問題

文化の中心問題の一つであるウチナーグチについては、２つの設問を用意した。

Ｑ９「ウチナーグチ（沖縄方言）は、沖縄の文化（たとえば、琉歌、演劇など）の基礎となるものであるから、大いに奨励すべきだと思いますか。」の結果を図１に示した。出身や居住の有無にかかわらずウチナーグチの保護・奨励に積極的であり、また、沖縄県居住者ほど沖縄出身者であるほどその傾向がみられる。

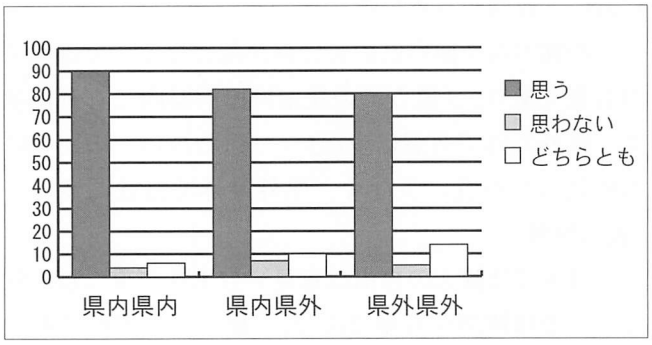

図１　方言奨励

Ｑ13「沖縄の人が方言を使うと、他府県のひとはそれを軽蔑的な眼で見る」の結果は図２に掲げた。居住・出身にかかわらず「思わない」と回答した比率が高い。県内県内者は「思わない」がドミナントではあるが、「思う」が10％、「どちらともいえない」が15％ほどある。沖縄出身者には、まだ何がしかの屈託があるということであろう。ウチナーグチ（沖縄語）は弾圧を受けた過去を持つ。本永（1983）は「沖縄における標準語普及の問題は、廃藩置県以来、性急な強硬策によってすすめられ、ややもすれば、方言の禁止、方言使用者の懲罰、方言の抹殺へと走る傾向があった」（p.444）と述べ「この硬化した徹底主義によって沖縄の人々は郷土否定の苦汁をなめさせられ、疎外感を抱くようになった」（同）と指摘している。方言を使用すること、標準語を使用しえないことは沖縄人に劣等意識を植え付けた。現今、方言使用への評価が高まりつつあるが、皮肉なことに方言は消滅の危機に瀕している。加治工（2008）は次のように述べている。

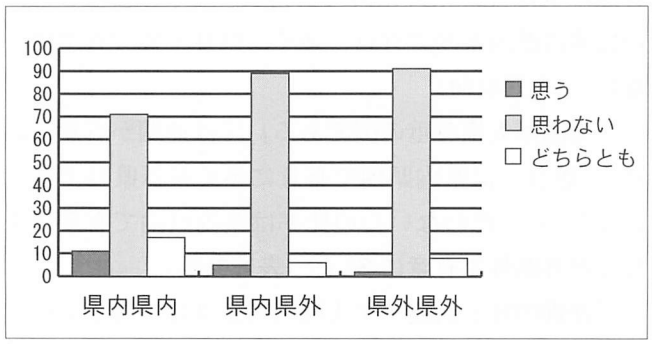

図２　方言使用軽蔑

琉球方言が消滅の危機に瀕するようになった要因として、①学校教育の拡充　②戦後沖縄における人口の那覇市への流入　③戦争による破壊と、日本政府の高度経済成長政策に基づく若者の離村と伝統集落の崩壊　④マスメディアの発達による全国放送を挙げることができる（『沖縄タイムス』）

若い大学生たちに方言弾圧の体験はない。忌わしい記憶もない。かえって方言への関心が高まっている。その高まりは沖縄県出身者に限らない。

2　米国の影響と貢献

対米国の文化不安６項目のうち、３項目で連関が有意であった。それらはQ11米国留学制度、Q12日常生活の米国化、Q17人権尊重である。結果を図３から図５に示す。Q11「戦後米軍援助による米国留学制度がなかったならば、今日のような沖縄の文化的・社会的発展はみられなかった」について県内県内群は４割超が「思う」としている。県内県外群、県外県外群は２割未満である。一方「思わない」は逆の傾向である。県外出身群は50％を超える者が「どちらともいえない」としている（図３参照）。第二次世界大戦後の沖縄の再建、復興の指導者養成について、藤原（1983）は「この制度が沖縄の復興・発展に与えた影響は大きい」（p.414）と述べている。

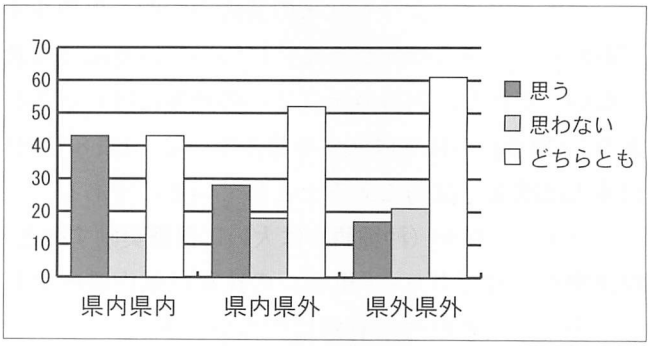

図３　米国留学制度

Q12「二七年間にわたる米国の統治によって、沖縄の人々の生活様式は、かなり米国化してきましたが、

それはよいこと」について、どの群でも60％以上が「どちらともいえない」と回答し、この状態を是とする者の比率は県内県内群に多く、県外県外群に少ない。いずれも20％を下回っている。是としない比率は是とする場合と逆になっている。積極的な態度を示していない。（図４参照）

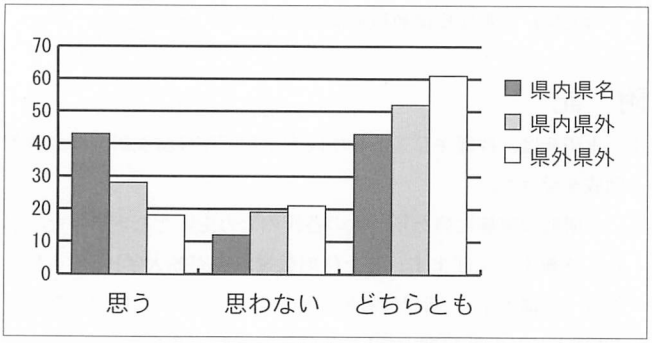

図４　生活の米国化

Q17「米国は人権尊重の国だといわれていますが、実際に米国人の生活や、やり方を見聞きして、確かにそうだ」と「思う」比率は県内県内群に多く20％を超えている。県外県外群で少ない。また「思わない」の比率は県外県外群で50％弱となっている。沖縄に居住する群では30％程度となっている。県内県内群の米国に対する「思い」は県外群に比してやや好意的である。多くの被害を蒙っているはずなのに一定程度の支持が与えられている。（図５参照）

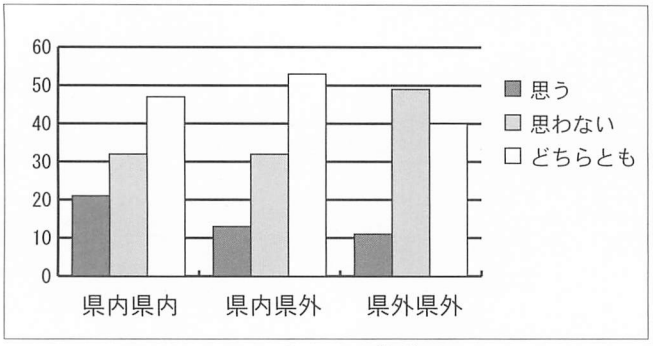

図５　米国は人権尊重

３　義理人情と自由自主性

Q14「日本では義理人情とか恩とかがやかましくいわれていて、個人の自由な意見や自主性が重んじられていない」については、「思わない」がどの群でもドミナントであるが、その比率は県内県内群が低く、県外県外群で高くなっている。「思う」の比率は県外群で高くなっている。「どちらともいえない」の比率は沖縄出身群に高く、県外県外で低い。（図６参照）

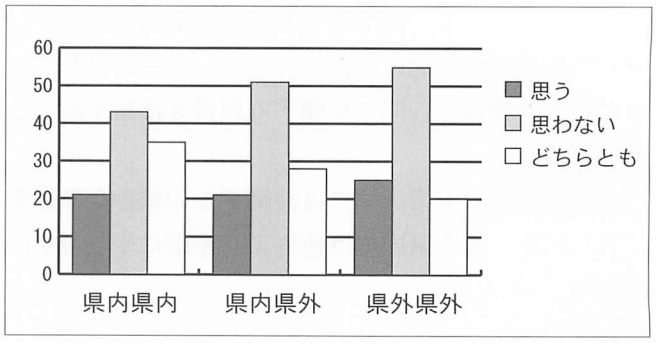

図６　義理人情と自主・自由

４　沖縄人の自己像

沖縄人であることの不安に関する文化問題項目６種のうち４項目で連関が有意であった。Q10「沖縄の人々の中で、沖縄はつまらないところで、自分たちは弱いものだと考えている人が多い」というのは沖縄人としての劣等不安である。沖縄人がどう評価し、県外者がどう評価しているのか。「そんなことはない」との回答がドミナントである。「思う」とする回答の比率は県内県内群で多く、県外県外群に少ない。県内県外群はその間にある。居住地、出身地を問わず、大学生の間では沖縄人であることを特別に思うことはほとんどないようである。ただし、沖縄出身者にあっては15％ほどの者が沖縄人であることに劣等意識を持っている。

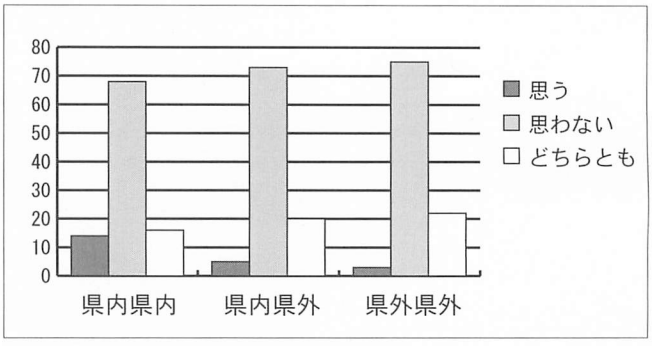

図７　自己卑下

おわりに

沖縄問題の当事者は決定権を制限された沖縄人である。幾多の歴史的、文化的、政治的問題の集積として沖縄問題は存在している。そこに生まれ生活するものと、そことは関わりのない、あるいはかかわりの薄いものとの間に事態の受け止め方に濃淡、差異があるのは自然であろう。また、沖縄の出身者ではないが教育を受けるために沖縄居住となっているものとの間に差異が生じるのも当然と言えば当然の成り行きである。結果として、戦争不安に関しては群間の差異は認められず、共通の不安になっていることが明らかにされた。

反応比率の高さは、県内県内群と県外県外群を両極に、県内県外群がその間に位置を占めていることはわずかながらも沖縄滞在の間に見聞する影響を推察することができる。

文化領域の対米国認知には沖縄学生の微妙な陰影が認められる。県内県内群は他群より米国にやや肯定的である。

参考・引用文献

東江平之（編著）　1983　『復帰不安の研究』Ⅲ、琉球大学復帰不安研究会

加治工真市　2008　「しまくとぅばの日に思う」『沖縄タイムス』９月17日　朝刊

藤原幸男　1983　「米国留学制度」　沖縄大百科事典刊行事務局（編）『沖縄大百科事典』下　p.414.

本永守靖　1983　「方言撲滅運動」　沖縄大百科事典刊行事務局（編）『沖縄大百科事典』下　p.444.

中村　完（編著）　2005　『復帰後沖縄における社会不安に関する継続的研究』　琉球大学社会不安研究会

名城嗣明、他　1985　「復帰不安の研究　Ⅱ－その復帰後10年の変遷－」　『琉球大学教育学部紀要』第28集、第２部、pp.167－214.

與久田　巌、大城宜武、中村完　2008　「大学生を対象とした沖縄の社会状況の認知に関する研究」　『沖縄キリスト教短期大学紀要』第36号、pp.133－144.

与那嶺松助、他　1981　「復帰不安の研究－沖縄の施政権返還をめぐって－」　琉球大学心理学教室（編）『与那嶺松助教授記念論文集』与那嶺松助教授追悼記念事業会、pp.29－154.

附　記

1　本研究は、沖縄キリスト教学院大学2007年度特別研究助成費の助成を受けた。

2　本研究の実施に当たり、次の各氏の協力をいただきました。記して感謝申し上げます。井上佳朗教授（鹿児島大学）、國吉和子教授（沖縄大学）、新里健教授（沖縄県立大学）、大城実名誉教授（沖縄キリスト教短期大学）、ト部敬康講師（奈良大学）、山本健司講師（名桜大学）。

3　調査に協力いただきました学生の皆様に感謝申し上げます。

4　本稿の一部は第70回日本心理学会（於北海道大学）でパネル発表したものである。

How university students perceive Okinawa issue ?

Yoshitake Oshiro, Iwao Yokuta, Tamotsu Nakamura

ABSTRACT

The purpose of this paper is to analyze how university students perceive Okinawa issue. 644 university students answered 73 questions. These students were classified into three groups. Group 1 is Okinawa resident Okinawan, group 2 is Okinawa resident Japanese, and group 3 is not Okinawa resident Japanese.

There were no significant differences among group concerning war anxiety. Students opposite to war matter highly. Cross analysis of the question and the group revealed that there are significant correlation question and group in 10 of 18 cases. Japanese students respect to Okinawan culture. Okinawan student felt inferiority complex slightly.